

第7回



入選作品集

令和5年7月
(一社)家の光協会 普及企画部

■ ■ 総 評 ■ ■

J Aの教育文化活動は、『家の光』をはじめとする「家の光三誌」を積極的に活用しながら、女性組織や支店での協同活動を展開することによってJ A、組合員、地域とのつながりをつくり、J Aの事業や活動、組合員の拡大など組織の根を広げていくことをめざしています。第7回となる家活グランプリですが、今回はコロナ禍による規制の緩和が進められてきたなかでの事例もみられました。とはいえ、まだまだ多くの制約があるため、コロナ禍でも前向きな姿勢で創意工夫をおこない、仲間と協力しながら取り組む実践事例が依然として多く寄せられました。3人の審査委員により、①組織・地域の特性を踏まえて、創意工夫して「家の光三誌」の記事を活用しているか、②教育文化活動や記事活用の効果と広がりがみられるか、③豊かな表現力で活動内容が表されているかを評価の基準として、12の作品を対象とした審査がおこなわれました。厳正な審査の結果、以下のように各賞を決定しましたが、いずれも甲乙つけがたい力作ぞろいで、惜しくも今回の選には漏れた作品からも多くのヒントが得られました。このような実践事例に学びながら、家活の輪がますます広がることを期待しています。

審査委員長 摂南大学 教授 北川 太一

【第7回「家活グランプリ」審査委員】

審査委員長 摂南大学 教授 北川 太一

審査委員 家の光専門講師 佐久間 幸子

家の光協会 常務理事 木下 春雄

※肩書きは審査会当時・敬称略

* 目 次 *

【最優秀賞】

○対話からその先へ

愛知県 J A あいち中央 安城北部ブロック 坂田 由里子 3

【優 秀 賞】

○～私たちの再出発。ヒントは『家の光』から～

神奈川県 J A あつぎ 睦合支所 経済課 野田 奈緒 5

○進化する女性部

静岡県 J A 遠州夢咲 組合員ふれあい室 飯塚 容子 7

【佳 作】

○『家の光』×SDGs 楽しく学んで広がる活動を目指して

岩手県 J A 江刺 総務部 組合員くらしの活動課 及川 春香 9

○『家の光』で「ちむどんどん」

福井県 J A 福井県 文殊支店 大橋 奈津実 11

※「家の光用字用語集」にもとづき、本文の表記を一部変更しています。

※所属は応募当時のものです。

対話からその先へ

愛知県 J A あいち中央 安城北部ブロック

坂田 由里子

組織活動の取り組み方について、今年度のキーワードは「つなぐ」であり、昨年度重要視してきた対話から「人と人」をつなぎ、さらには「人と J A」をつなぐ取り組みを意識して活動する必要があると組織生活課から伝えられました。感染症対策も徐々に緩和され、活動が再開するなかで行った主な 3 つの取り組みについてお話しします。

一つめは「フレミズの森」会員増加に向けた取り組みです。7 月にランチプレート、8 月に苔玉、10 月に『家の光』2010 年 4 月号掲載の「カラフル絵巻きずし」、12 月にトピアリー作りを行いました。会員にダイレクトメールを郵送し、講習会参加者を募集する一方、会員以外にも直接声かけを行います。見本などを飾りポスターを掲示して告知し、他の講習会に参加されたフレミズ世代対象者へ声かけをしました。7 月の貯金感謝週間で粗品引換担当をしたとき、机の上に苔玉を置いておきカワイイと興味を示したらチャンス！ 「8 月に講習会をしますよ」と誘い 2 人が「フレミズの森」に加入しました。8 月の親子体験に参加した方には「10 月に飾り巻きずしを作りますよ」と誘い 2 人が加入。そのほか、窓口でフレミズ世代対象者へ声かけするなど直接顔を見て話すことで、一歩ずつ着実に会員が増加し、1 月末までに 9 人増員しています。

二つめはアクティブ・メンバーシップの確立をめざす取り組みです。女性組織、サークル活動などは J A 事業とのつながりが薄れてきていますが、J A はカルチャー教室とはちがい活動を通じて事業へとつなげることがたいせつです。そこで、新安城支店では 4 月に、三河安城北支店では 5 月に、支店組織活性化協議体「がやがやワクワク会」のなかで勉強会を開催し、支店活動や地域の活性化において、イキイキレディースが単に参加するだけでは終わらない、参画型の仕掛けを行いました。

新安城支店では、助け合い活動組織「みのりの会」が行うミニデイサービス「ふれあい広場」で行ういつもの体操で、『家の光』に掲載されている体操もやってみようと実践しました。新安城支店の女性組織「しんあんレディース」は支店ふれあいまつりで、さつまいもご飯のふるまいを企画し、まつり当日は役員たちも「とても楽しかった」とみんなでいっしょに作り上げた喜びを分かち合いました。また、日ごろのサークル活動の成果を組合員に見ていただこうと作品展も企画しました。絵手紙など 6 サークルが出展し、作品のない運動系サークルや女性総代も作品展来場者の受付や会場整備などを担当。しんあんレディース役員が中心となって大盛況

のうちに終了しました。会長が「みんな頑張ってくれたので慰労会を行いたい」と反省会を企画し、作品展の反省点・改善点をうかがうとともに労をねぎらいました。グループワーク形式にすることで意見も多く出て、コミュニケーションも深まり次年度へのやる気につながりました。

三河安城北支店では、がやがやワクワク会でわたしが『家の光』2012年2月号の「お福分け鶴」を紹介すると、参加者が「ステキ」と気に入ってくれ、家へ帰って「玄関と部屋に飾ったよ」と写真を見せてくれました。次はメンバーたちで『家の光』2017年2月号の「ネクタイ1本で作るポシェット」を企画し製作しました。「来年は親子を募集して地域の活性化につながる活動がしたいね」と夢も膨らみます。みのりの会では会長が毎月定例会の開催を提案し、会議のほか『家の光』2022年12月号の「ウサギの正月飾り」や、『家の光』2020年4月号「簡単リメイク！ ワイシャツかっぽう着」を作る家活も行うことで、会員のモチベーションが上がりました。参加型から参画型への仕掛けの勉強会を行ったことにより、いままでなんとなく足を運んでいた人も自分たちで考え企画したことだからこそ積極的に参加できたと思います。

三つめは家活の取り組みです。SDGsを意識した、『家の光』2022年7月号別冊付録「布と紙のやさしいハンドメイド」に掲載のチュニック作りには21名が参加。タンスにしまい込んだ古い着物がリメイクでチュニックに変身し、「これならまた着られるね」と嬉しそうでした。『家の光』2022年9月号の「みつろうラップ」作りでは、「ラップを使い捨てるのはもったいない」の精神で22名が参加。「何回も使えてエコだから重宝してるよ」と教えてくれました。

このように講習会や会議などさまざまな場面で家活を行い、体験してもらいながら、「『家の光』に載ってるよ」とそのつど推奨しています。支店職員の朝礼スピーチで今年も『家の光』の記事を取り上げ、職員一丸となって推奨し、一月末時点の『家の光』新規購読獲得実績は、新安城支店11冊、三河安城北支店8冊、合計19冊です。

次年度はフレミズの森会員、イキイキレディースに、より積極的に組合の事業や活動に参加してもらうことで、「わたしたちのJAである」という意識をもっと高めてもらいたいです。多様化するニーズを対話からくみ取り活動に反映させていければ、JAは欠かすことのできない存在になっていきます。いま、少しずつ動き出したイキイキレディースの参画への気持ちのとぎれないよう、バックアップを続けていけば更なる発展につながると信じています。そしてわたし自身が挑戦し続けていくことで、フレミズの森、イキイキレディースの組織活動にたいする参画意識がさらに向上するよう導いていきます。

～私たちの再出発。ヒントは『家の光』から～

神奈川県 J A あつぎ 睦合支所 経済課

野田 奈緒

2020年4月、新型コロナウイルス感染拡大が始まると同時にわたしの生活指導員としての業務がスタートしました。コロナ真ただ中で女性部活動はすべてストップ。初めての業務と初めてのコロナを経験して、わたしは不安と戸惑いでいっぱいでした。そもそも、「女性部活動ってなにをしたらよいのだろう？」と、とても悩みましたが、「まずは例年行われていた活動内容を見て参考にしよう！」と思い、前任者から引き継いだファイル、データ、写真にひととおり目を通しました。そこには、生活指導員が企画した講習会や旅行に楽しそうに参加する女性部員の姿や、真剣に作業に取り組む姿が映っていました。そのようないままでの女性部活動を見て、わたしも「女性部員に楽しんで参加してもらえる講習会や旅行などの企画をしたい！」と思い、まずは先輩がたが企画した講習会の内容や募集チラシの作り方をまねしてみることから始めました。チラシ1枚で講習会の魅力を伝え、参加してもらえるよう工夫が施されているのを見て、自分が同じものを作ることができるのか不安と楽しみでドキドキしたことを思い出します。チラシを作り、いざ女性部回覧で募集を募ったとき、新型コロナウイルス感染症の第1波が押し寄せてきていたこともあり、女性部員の不安も大きく、思うように参加者を集めることができませんでした。それからというもの、企画をしては緊急事態宣言や、まん延防止等重点措置の影響で、講習会は延期・中止の日々を繰り返していました。

そこで睦合地区女性部では、「コロナ禍だからこそ、今できること」に注目し、いままでのように、支所に参加者が集まりみんなで作業する講習会とは別に、3つの開催方法を取り入れることにしました。まず1つめは、キット購入のみで支所に出向かなくても講習会に参加できる方法。2つめは、生活指導員がみずから講師となり、部会に出向いて講習会を行う方法。3つめは、現地集合で参加者同士の距離が広く保たれる屋内会場や屋外でイベントを実施する方法です。

キットのみの配布、生活指導員が出向く講習会では、『家の光』2020年9月号より「17色のビーズブレスレット」と、2021年5月号より「UVパール3WAYネックレス」の取りまとめを実施し、開催時にはSDGsを学ぶ勉強会も行いました。キットのみの配布のさいには、材料と作り方のチラシ、SDGs冊子、参加への感謝の気持ちを込めたメッセージカードを一つのセットにし、生活指導員が配布に伺いました。出向く講習会でも同様に、材料と作り方のチラシ、SDGs

冊子を持ち、生活指導員が自ら部会に出向き講師となり、女性部員の家活に取り組みました。現地集合のイベントでは、睦合地区女性部としてはじめての試みである、「ボウリング大会」と「グラウンドゴルフ体験会」を実施しました。コロナ禍の開催ではありましたが、ボウリング大会には13名、グラウンドゴルフ体験会には18名の女性部員に方に参加をいただくことができました。

また、『家の光』2021年7月号に掲載されている「砂を重ねて描く グラスサンドアート」にも挑戦しました。講師を招き、初めてのグラスサンドアートに部員のみなさんはワクワク！ 5月には夏バージョンで開催し、とても人気があったので10月には2度目の開催を行いました。その他にも、『家の光』に毎月掲載されている、SDGsを楽しく学ぶことができる漫画を記事紹介として女性部で回覧したり、2か月に1度開催される女性部長会議で『家の光』のおすすめ記事の紹介を欠かさず行っています。

また、2021年から睦合地区女性部独自の取り組みとして、SDGsの目標2番「飢餓をゼロに」につながる、フードドライブ、フードバンクへの食料品の寄贈や、目標12番「つくる責任、つかう責任」につながる「雑巾寄贈」の取り組みを新たに始めました。コロナ禍でも自分たちが「今できること」を探していくなかで、『家の光』を開き女性部活動へのヒントを得ることが増えました。『家の光』を活用した女性部活動が活発になることで、JA職員、組合員、地域住民の間でいままでよりも強い関係性を築くことができていると感じています。

これからも『家の光』をとおして、新たなことに挑戦し続けられる魅力あふれる女性部活動をサポートしていきます。

進化する女性部

静岡県 J A 遠州夢咲 組合員ふれあい室

飯塚 容子

3年にも及んだ新型コロナウイルスの影響で、女性部の活気は失われてしまったように感じました。

ほとんどの活動が制限されるなか、女性部員の英知を結集し、「もっと女性部員に元気を！」「もっと女性部活動に活気を！」を合言葉に、令和3年に「女性組織検討委員会」を立ち上げました。

検討委員会の構成メンバーは、現状に立ち止まるのではなく、進化する女性部をめざそうという思いで集まった、それぞれの地区の歴代部長経験者8名です。

隔月に開催した組織検討委員会で、わたしたち J A 遠州夢咲女性部活動の課題が2つ見えてきました。

課題の1つめが、毎月届く『家の光』が有効に活用されていないこと。

課題の2つめが、PR不足のため女性部活動の認知度が低いこと。

その課題を解決するために取り組んだのが、次の2点です。

1つ目が、女性部活動の参考書である『家の光』を開いてもらう工夫です。ほとんどの女性部員が購読している『家の光』ですが、仕事や家事に追われて、ついつい雑誌を開くことを忘れてしまうことがあるそうです。

そこでわたしたちは、女性部員の関心が高い「家庭でできるSDGs」というチラシを、4月～9月にかけて毎月発行することにしました。『家の光』に掲載されているSDGsに関する記事を参考に、クイズを出題し正解者にプレゼントを用意し、『家の光』を開くきっかけづくりを行いました。合計で約200通の応募があり、口コミでそのクイズの存在を知った女性部員2名が、新たに『家の光』を購読していただけることにもつながりました。ページを開いてもらえれば、『家の光』のよさを感じ、購読してもらえるところを実感した瞬間でした。

2つめは、女性部活動をもっと対外的にPRすることです。各地区ですばらしい活動をしているのにもかかわらず、女性部活動の認知度が低いという思いがありました。

「J A 広報誌」や「女性部チラシ」では、女性部活動はたびたび報告していますが、じゅうぶんなPRができているとは思えませんでした。しかも、世間ではペーパーレス化やデジタル化が進み、情報はリアルタイムで、手軽に手に入るものになってきました。

そんななか、『LINE で女性部活動の参加申し込みがもっと簡単にできないの?』という女性部員さんからの提案をきっかけに、わたしたち遠州夢咲女性部は、静岡県で初めて女性部だけの「公式 LINE」を開設しました。

女性部活動のイベント情報はもちろん、意外に忘れがちな昔から地方に伝わる年中行事のお知らせや、それにまつわる行事食を投稿することにもしました。

また、写真や動画を投稿・閲覧できる「LINEVOOM」という機能を活用し、各支部や各地区で開催されたイベントをたくさんの写真を添えて投稿しています。

公式 LINE 開設から1年半で登録者は301名となりました。女性部員以外の方にも登録いただき、対外的な PR の一助にもなっています。

さらには、この「公式 LINE」のチャット機能を活用し、会議の案内や打合せなど、本部委員との連絡も LINE を通じて案内し、ペーパーレスにもつなげることができました。

とはいえ、スマホに慣れていない人や使い方がよくわからない人も、まだ多くいます。地域で取り残される人がいないよう、各地区で女性部員や組合員向けのスマホ教室を開催することにしました。昨年度は JA 全中のスマホ教室の支援を受け実施しましたが、本年度は『家の光』連載の「スマホ道場」を教科書として活用し、金融職員とも連携し、職員みずから講師となってスマホ教室を実施しています。『家の光』の記事を活用し、部署の垣根を超えた記事活用を展開することができました。

各地区で開催したスマホ教室は2年間で36回、受講者は382名の方にご参加いただきました。

この「公式 LINE」で活動情報を投稿し続けていると、女性部員から「他の地区の活動に参加したい!」という要望が数多く寄せられました。それを受け、いままでなかった地域の垣根を超えた女性部活動に参加できる仕組みを整えました。それにより、『家の光』手芸教室などのさまざまなイベントに、地区の垣根を越えて、だれでも、どこでも、女性部活動を自分にあった時間に楽しめるようになりました。

これによって新たな交流が広がり、食育活動グループなどの地区の枠を越えた新しい活動グループも誕生し、女性部活動に活気を与えています。

時代の流れはめまぐるしく変化しています。少し前の当たり前が当たり前でなくなっている現在、わたしたち JA 女性部もその変化に対応できる組織へと進化していく必要があるのではないのでしょうか。

こんな時代からこそ、改めて「女性組織検討委員会」を開催することによって、女性部と事務局とのきずなが深まり、『家の光』を中心とした活動を展開することで、多くの女性部員の笑顔が戻ってきたと思います。進化し続ける女性部をめざし、『家の光』とともに一歩ずつ前進していきます。

『家の光』×SDGs 楽しく学んで広がる活動を目指して

岩手県JA江刺 総務部 組合員くらしの活動課

及川 春香

「JAという組織、女性部活動はすべてSDGsにつながっている。わたしたちはそれを知らず、意識していないだけ」

これは3年前、わたしが女性部担当になった当時の女性部長の言葉です。同時期に社内報を作成する機会に恵まれたわたしは、「職員でもSDGsについてわからない人は多いので、JAとSDGsの関わりについて連載してみよう」という先輩のアドバイスと、SDGsを理解したいという考えから、約半年間、取材をとおしてJAの活動とSDGsとの関わりをまとめました。その結果、JA・女性部の活動ほぼすべてがSDGsに関わることを知り、理解するどころかその奥深さに考えさせられる結果となりました。

『家の光』の普及担当になったのはその後で、当初、わたし自身がさまざまなジャンルの本を読むことから「『家の光』は記事の種類が豊富。一度読んでもらえれば興味のある記事から波及して愛読してもらえる！」と考えていました。しかし「一度読んでもらえれば」ということが高いハードルであり、ターゲットとなる女性、とくに若い世代は『家の光』という雑誌の存在を知らず、読書習慣がない人が知らない雑誌を読む機会はほぼありません。なんとか『家の光』の魅力を伝える方法はないか考える日々が続きました。転機が訪れたのは、女性部活動について考えていたときでした。

わたしが担当する女性部の支部役員のほとんどは『家の光』購読者ですが、活動内容を考える会議で『家の光』の話題は出ませんでした。料理や手芸、体操など活用できる記事がたくさんあるのにも思い話を聞くと、役員の中では「『家の光』＝料理講習会」の印象が強いことに気づきました。また、「『家の光』は購読しているが、付録やレシピなど興味のある記事しか読んでいない」という声もあり、「『家の光』の記事を使った講座、とくにコロナ禍で注目度の高い手芸は需要があるので……」という考えに至りました。そして、『家の光』9月号は毎年SDGsの特集が組まれる号。そこで、『家の光』・SDGs・手芸を組み合わせた「『家の光』×SDGs ハンドメイドで学ぶSDGsミニ講座」の企画を立てました。

講座の目標は、老若男女問わずSDGsを知り、意識して実践するとともに、JA（協同組合）活動そのものがSDGsであることを理解することにしました。ここで問題となったのは、「SDGsについて、自信をもって他人に教えられるほど精通した職員がいない」ということでした。そこで家の光協会普及文化本部の担当

者に企画を説明し、相談をした結果、快く講師を引き受けてくださり、座学のほか、手芸（すべてSDGsに関連するもの）に関わる記事の提供にもご協力いただけることになりました。

参加者はJA管内に住む方であれば、組合員かどうかや年齢・性別を問わず、全3回の講座のうち好きな講座だけの参加も可能とし、間口を広げました。JA広報誌での宣伝のほか、関連施設・地域の施設にチラシを設置、ローカルラジオや女性部イベントなどで周知を図った結果、8月末までに14名からの申込みがありました。

9月に開催した第1回講座は「SDGsの基本・防災ガイド活用・ひもトレ（『家の光』2022年9月号掲載）・17色のビーズブレスレット（『家の光』2020年9月号掲載）」の4本立て。意外にも一番好評だったひもトレは、座位でできる負荷のかからない運動が気に入ってもらえました。第2回講座の内容は「SDGsについておさらい・『家の光』12月号で学ぶSDGs・みつろうラップ」。この回は、SDGsに興味を持ったJA職員（男性！）も参加し、他の参加者と交流しました。最終回となった第3回は「『家の光』で考える身近なところにSDGs・米袋のエコバッグ（『家の光』2014年12月号掲載）」という内容で、作成したエコバッグに自分のバッグごと入れて帰っていく参加者の姿が印象的でした。どの回も、『家の光』をテキストとしてフル活用した家の光協会の講師の方の話が丁寧で分かりやすく、SDGsを身近に考えられるような講座と好評でした。14名だった参加者は、口コミや広報誌での活動記事で問合せ、申し込みが続き、最終的に46名（JA職員・複数受講を含む）となった。

また、「手芸に興味があった」という参加理由がほとんどなのにたいし、講座を受けて印象に残ったことは「SDGsについて考えるきっかけになったこと」が大多数を占めたアンケート結果から、講座をとおしてSDGsを意識するきっかけを提供できたと考えています。

そして嬉しいことに、講座に参加した女性部の支部長が発起人となって17色のビーズブレスレットを作り、支部長自らSDGsについて解説する支部活動が行われました。支部外の人も多く参加し、評判も上々だったとのこと。他の支部からも、「記事活用について相談したい」「『家の光』のバックナンバーはあるのか」といった問い合わせが続いており、SDGs・『家の光』への興味・関心は少しずつだが確実に広がっていると実感しています。

今回、さまざまな方の協力で講座を実現することができました。結果として、JAとSDGsの関わりや実践することのたいせつさ、そして『家の光』の魅力を伝えられたと実感しています。今後も『家の光』×SDGs企画を継続し、活動がさらに広がるようできるかぎりのことをしていきたい。

『家の光』で「ちむどんどん」

福井県 J A 福井県 文殊支店
大橋 奈津実

J A 福井県では『家の光』普及の取り組みの一環として、昨年度から「『家の光』ディスプレイコンテスト」を開催しています。今年度もコンテストが開催されると聞き、今年こそ賞を取れるようにがんばろうと取り組みました。まずは場所の確保から始めました。昨年は支店正面玄関の風除室を利用しましたが、人の出入りがあるため、多くの人の目に入りますが、ゆっくり見てもらえませんでした。昨年の反省を踏まえ、今年は支店併設の農業施設センターの協力もあり、センター中央に場所を確保することができました。広く場所をとりめだつように季節に合わせた飾りつけをしました。

飾りつけはもちろんですが、紹介コーナーの内容にはさらに力を入れました。『家の光』1 2月号の紹介、別冊付録（家の光家計簿、人生100年時代のお金ガイド）の紹介は、パッと見てすぐに掲載内容がわかるよう手書きのPOPを作りました。また、バックナンバーもたくさん置き、手軽に手に取って見ていただけるようにしました。さらに、『家の光』の記事活用で作った作品を展示しました。支店職員も気にかけてくれ、いっしょに展示用の作品を作ってくれました。また、『家の光』記事活用グループの活動で作った作品も展示しました。ディスプレイに『家の光』記事活用グループ募集案内を貼り付けて呼びかけもしました。そして、ありがたいことに今回のディスプレイコンテストでは優良賞をいただきました。

J A 福井県の福井地区では女性部が8エリアに分かれており、今年度は各エリアの女性部でひとつ以上の「家の光記事活用グループ」を作ろうという取り組みをしました。わたしが事務局をしているみなみエリア女性部では、フレッシュミズ会員へ声をかけ、家の光記事活用グループ「ちむどんどん」を結成しました。グループ名は、当時放送していた朝ドラのタイトルから連想しました。言葉の意味を調べたら沖縄の方言で「胸がドキドキわくわくする様子」を表す言葉でした。ちょうどグループのイメージにぴったりだったのでこの名前に決めました。はじめは5人で結成しましたが、そのうち2人は『家の光』を購読していませんでした。しかし、活動の趣旨を説明し『家の光』の購読をお願いしたところ、すぐに購読してくれました。フレッシュミズは40代の女性部を中心として活動しており、『家の光』を購読してない方が多い年齢層だと思います。部数は多くないですが、この年齢層の人たちに購読してもらえたことはとてもよいことだと思いました。

「ちむどんどん」での活動内容を決めていたときの事です。はじめは「『家の光』

を使ってなにをしようか？」「どんなことが載ってるんだろう？」となかなか内容が決まりませんでした。しかし、2回3回と活動を重ねるごとに、「次は手芸で小物を作りたい！」「今度は料理がいい！このレシピをアレンジしてみよう」と、どんどんアイデアが出てきて活動回数が足りなくらい、活発な活動になりました。さらに、途中でメンバーが2人加入して7人になりました。来年度の『家の光』の購読につながり、女性部員の増加にもつながりました。

『家の光』を普及し、よさを分かってもらい購読につながる反面、長年愛読してくださっている方が高齢化で購読をやむなく中止されているのも事実です。「高齢で活字を読むのがつらい」「もう本を読まなくなったので」という理由で中止される方が多く、これからは若い世代に『家の光』のよさをわかってもらえるような推進をしていくことがたいせつだと感じます。同時に、より若い方に興味を持ってもらえるような内容に変えていくこともたいせつだと感じます。最近は何んでもスマホで調べられます。本も電子書籍で読むのが当たり前の時代です。それが当たり前の世代の方に雑誌を買ってもらうためには、魅力を伝えなくてははいけません。その方法のひとつとして、家の光記事活用グループを作り、活動することはよい結果につながったと思います。来年度も『家の光』のディスプレイを続けていきたいと思っています。さらに、記事活用グループのメンバー募集や、新しいグループ募集にも力を入れたいと思います。今回のディスプレイコンテストでの受賞に満足せずに、これからも『家の光』の新規購読につながるように普及活動をすすめていきたいと思っています。